恥辱のあやつり人形

催眠

洗脳

のんけ調教小説＆ミニ漫画

南国球児

のんけ調教シリーズ

恥辱のあやつり人形

偶然手にした不思議な人形
のんけの幼馴染みに悪戯して…

小説版

vol.1

南国球児

のんけ調教シリーズ

恥辱のあやつり人形

偶然手にした不思議な人形
のんけの幼馴染みに悪戯して…

小説版

vol.1

南国球児

主人公マコト
幼馴染み
のんけの亮太
ハアハア
ビビの

恥辱のあやつり人形 vol.1 亮太

1　不思議な木箱

学校帰りに偶然拾った木の箱
古くてなんだか価値のありそうな箱だった。周りを見渡し誰もいないのを確認して持ち帰る。

自分の部屋に入って鍵を閉めた。
箱を振るとカサカサと聞こえ、
何か軽い物体が入っているのが分かる。

どこから開ければ良いのか分からない。
壊して中を取り出そうかとも思ったが、
この木箱自体価値があるかも知れない。

色々とイジっていると、ある側面が数ミ

リだけ動いた。すると別の側面も動く。
ネットで調べてみると、カラクリ箱と言うものだと分かった。
ものによっては１２回以上のカラクリがあるらしい。
なかなか開かないものの、どこかを動かすと別の場所が動く魅力に惹き込まれ、時間を忘れて夢中になっていた。

パカッ！

「やったー！」

思わず大声を上げてしまい、我に返って時計を見ると深夜１時を回っていた。

気を取り直して箱の中を見ると、
フェルト生地で出来た小さな人形と、

紙が１枚入っていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

この人形は、人を思い通りに操ることが出来ます。
ただし、その効果は１日に１回３０分までです。
その操っている間の記憶はありません。
この人形を良いことに使うのも、悪いことに使うもあなた次第です。

使い方
操りたい人の体毛を人形の背中に入れてください。
その体毛が入っている間は何度でも同じ相手に使うことが出来ます。
相手に近づき、人形を強く握って念じてください。そうすれば相手は従順な操り人形になります。

言葉で命令してください。
その３０分間はどんな命令にも素直に従います。
ただし、第三者に危害を加えたり、自傷行為を命令することは出来ません。そのような命令をした場合、人形は即座に消失し、世にも恐ろしい副作用が襲いかかります。

３０分経ったら、必ず解除を行ってください。
解除方法は、人形を強く握り、元に戻るよう念じるだけです。

操られていた時の記憶は完全に消えて元に戻ります。

注意！

３０分過ぎても解除を行わずにいると、世にも恐ろしい副作用が襲いかかります。

詳しい使い方は以下のURLから！
チャットでも質問出来ます。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
ボクはこの紙に書かれた説明文を読んでガッカリした…

子供が書いたような幼稚な説明書もそうだが、こんな古くて価値のありそうなカラクリ木箱に入っているのに、まさかインターネットの URL が書かれているとは…
何かの詐欺サイトへのリンクだろうか？
個人情報を抜き取るとか…？
ガッカリ感と、怒りのような感情の後に、

だんだん可笑しくて笑えてきた。

こんな手の込んだ悪戯なのに、説明書がすごく幼稚で、しかもあり得ない内容で、いったいどんな人がコレを作ったのだろう…？

ぷぷぷ…

思わず噴いてしまう。

人形を手に取ってじっくり観察する。

なるほど…

この背中にある切れ目に髪の毛を入れるのか…

ニオイを嗅いでみたが、不思議なほど無臭だった。

作りも意外としっかりしている。

子供が悪戯で作ったにしては、ちゃんとしていた。

「手の込んだ悪戯だな…」

そうポツリと独り言を口にしてベッドに横になった。

もう深夜２時を回っていた。

明日も学校だ…もう寝よう…

2　ボクはいじられキャラの帰宅部

ボクは学校ではもともと目立たないキャラだった。
部活に入っておらず、帰宅部の陰キャラというやつだ。同じような陰キャラ仲間とオンラインゲームをするのがいつもの日課で、それ以外はネットサーフィンをしてダラダラ過ごしている。

それが体育系の目立つメンバー達からイジられるようになった。
彼らからすれば只のおふざけだろうが、プライドの高いボクにはもの凄く屈辱的だった。
でも度胸は無いからへらへらと笑って、イジられキャラを演じている。

その体育部メンバーの中に気になるクラスメイトがいた。

野球部の主力で、女子からも人気があり、いつも自信満々でリーダー気質のイケメン龍輝くんだ。
彼はボクをイジってくるグループの中心メンバーで、帰宅部をバカにしたような言動で一番ムカつく…

イジられキャラとしておいしくイジってあげている…そういう態度なのだ。

女子の前でも平気で下ネタで絡んで
おちょくってくる。

「帰宅部はやること無いから
　毎日オナニーばかりしてんだろ？」

女子の前でそんな恥ずかしい事を言われ、顔を赤くして必死で否定すると、その様子を面白そうに皆で爆笑するのだ。

ボクは体育系のそういうデリカシーの無い下ネタいじりがもの凄く嫌いだった。

彼らの間ではきっと平気かも知れないが、ボクはそういうのに慣れていないのだ。

そしてカラダいじりの言動にもプライドを傷つけられる。

「マコトちゃん、プニプニしてんな～」

体育の時間の着替えは屈辱タイムだ。

体育部の連中のバッキバキに割れた腹筋や、胸筋、肩、腕の力こぶなど…

それに比べて一切運動していないボクのカラダは白くてプニプニだ。

そんな柔らかいカラダを女みたいだな～と皆でイジってくる。おいしくイジってあげてます！という押しつけがましい感じが余計にムカついて来るのだった。

3　ボクの秘密

そういうイジられキャラをヘラヘラと笑って演じながらも、沸き起こる復讐心をため込んでいた。

特に気になっていた中心人物の龍輝くんへの復讐の思いが、恥辱願望に変ってしまっていた。

体育の着替えで、自慢げに上半身の筋肉を見せつけて絡んで来るとき、野球部特有のあの酸っぱい体臭、そしてグローブの古い革の臭いが鼻につく。

初めは臭いと感じていた。

そんな野球部臭さを抑えるために、シトラス系の香りがするシーブリーズを塗りたくって匂わせている。

そんな野球部特有の体臭と、酸っぱいシトラスの香りが合わさって、青春のフェロモンをまき散らしている。

プニプニのカラダにコンプレックスを感じていた事もあり、男らしい野球部のあの筋肉質なカラダ付きに憧れを抱いていた。

体育系の楽しそうなじゃれ合いや、男らしいぶっきらぼうな言葉遣いにも魅力を感じる。

ボクは中学の頃、好きな女の子に告白して「キモイ！」と言われ、
それがトラウマで女子に対しては
強いニガテ意識と、嫌悪感を持っていた。

そのせいなのか、
イジられキャラとしてだが、
絡んでくれた龍輝くんに対しては、
ムカつきと同時に、恋心のような
惹かれてしまう部分もあったのだ。

プライドを傷付けられるたびに、怒りの
感情と性的な興奮が沸き起こる。

ボクはいつしか龍輝くんをオナニーの
おかずにしていた…

野球部特有の口の悪さでイジってきた

り、突然背面からヘッドロックして絡んできたときの野球部の体臭とシトラス系の混じった青春の匂い、そして着替えで見せる筋肉質な上半身や、脇毛などをじっくりと記憶に焼き付けて妄想オナニーのおかずにする。

野球部の大会前の朝練があった日には、移動教室で誰も居ない時を見計らって野球バッグから汗臭いアンダーシャツや、スラパンを取りだしてニオイを嗅いでいた。そうすると、人気者の龍輝くんを辱めている気分に浸れるのだ。

そうやって密かに龍輝くんを恥辱しているお陰で、イジられキャラとしておちょくられても怒りが興奮へと変換された。

へへへ…自分のションベンの臭い嗅がれてるとも知らねえで…

どうやら龍輝くんはスラパンを生チンで穿いているようだ。
ボクのイメージでは、スラパンはパンツの上から穿くものだと思っていたから、思いっきりオシッコのシミで黄ばんでいたり、お尻の部分が線になって茶色く汚れているのを見てもの凄く興奮した。

龍輝くんの生チンを包んでいたスラパンの股間に鼻を押しつけて思いっきり嗅いでみる。

すっごくクッサーイ！！

野球部の汗臭さ、酸っぱいションベン臭、

そして青春のイカ臭がするのだ。

遠くから、堂々と振る舞っているイケメン野球部・龍輝くんの股間を眺め、
あのスラパンに染みこんだちんちん臭を思い出しては興奮して勃起していた。

バレたらどうしよう…

そういうスリル感や、変態行為に興奮を覚えていたことも大きかったが、やはり、カラダのコンプレックスからの憧れが性的な興味に繋がって行ったのだろう…

入手した龍輝くんの顔写真と、ネットで見つけた外人の全裸写真をコラ画像にしておかずにしていると、龍輝くんの本物の裸、ちんぽが見たいという願望が強ま

っていった。

あの木箱、人形を手にしたのは
ちょうどその時期だったのだ。

４　実験

不思議な木箱を拾った翌日、帰宅してすぐに引き出しの奥から人形を取りだす。そしてもう一度、小学生が書いたような説明書を読み返していた。

バカバカしいと思いつつも、いろいろと妄想して股間が熱くなる。

とりあえず誰かで試してみよう…

頭に浮かんだのは、ゲーム仲間の亮太だった。普段はスマホでオンラインゲームをするが、ときどき家に呼んで家庭用ゲーム機で一緒にゲームをする。

同じショボ系なのに、ボクに対しては上から目線でちょっとムカつくところもある。きっとボクのことを格下だと思っている。でも一番気を遣わない友達だ。

よし、亮太で実験してやる…

あり得ないと分かってはいるが、もしかしたら…そんな期待でドキドキしていた。

呼ぶと１５分くらいでやって来た。
自転車で飛ばせばそれくらいの距離に住んでいる。

「ふ～アッチィ～！
　クーラー付けようぜ！」

少しカラダがデカくて暑苦しい見た目の亮太はボクの前でだけ態度もデカく、まるで自分の部屋にいるように図々しい。

「なあ、なんかジュースとかある？」

『ジュースくらい買って来いよ…』

いつもながらの図々しさにイラッとしつつ、笑顔で持ってくる、と答える。

そしてゲームをセレクトしている亮太の後ろから近づき…

プチッ！

「イテッ！」

「あっ！ごめん…
　白髪だと思ったら違ったｗｗ」

「…？…はあ？」

驚き呆れたように唖然とした表情でボクを睨み付け、何も言わず、またゲームセレクトに戻った。

「なあ、どのゲームにする？」

「なんでも良いよ。亮太がやりたいヤツ」

ボクは適当に答えながら、人形の背中の隙間に亮太の髪の毛をねじ込んだ。

準備は整った…

本当に使えるのだろうか…？

期待で心臓がバクバク高鳴っている。

「とりあえず無難にフォートナイトでもやるか？」

そう言って亮太が振り返ったときだ。

ギュウ～ッと人形を強く握って念じてみた。

「……」

何を念じたのかは分からないが、とりあえず、頭の中で亮太が操り人形、言いなりになる姿を思い描きながら…

「……」

「亮太？どうした？」

「……」

亮太がフリーズしている。
ドキドキして心臓が破裂しそうに高鳴っている。

「おい、亮太、なに黙ってんだよ～」

「……」

固まったまま目も焦点が合わない様子で完全にフリーズ状態だ。

「おい、亮太、黙ってないで何か言えよ」

「はい、すみません。」

ドキドキしながら時計を見た。

よし、今からとりあえず２０分…

「亮太、立って…」

「はい」

そう答えてスッと立ち上がった。

目は遠くを見ている。

「お～い、何ふざけてんだ？」

そう言って軽くお腹の肉を押して、

恐る恐る摘まんでみた…
亮太は肥満体型なので腹の肉を摘まれるとスゴく嫌がる。

「お～い」

そう言いながら亮太の横っ腹の肉を摘まんでみたり、おっぱいの肉も摘まんでみるが全く無抵抗だ…

ボクは興奮が高まっていき、震える声で

「亮太、暑いだろ？
　服を全部脱いで良いぜ…」

そう言ってみた…

ドキドキ…ドキドキ…

しかし無反応だ…？？？

あれ？どうして…？

そしてあの説明書の文言を思い出した。

「亮太、服を全部脱げ…！」

「はい、分かりました。」

そう答えると、亮太はすぐに服を脱ぎだしたのだ！

そうか…命令しなくちゃダメなのか…

そう悟ったボクは次の命令を考えながら亮太が服を脱ぐのを見守っていた。

５　実験２

目の前にはすでに全裸姿で立っている亮太がいる。
なんという事だろう…
いざそういう状況になると、何を命令すれば良いのか興奮しすぎて頭が回らない。

時計を見る。

たったこれだけの命令で１０分以上が経過していた。

やばい…

残り１０分で何をさせよう…

アタフタと焦ってしまう。

３０分という時間は思った以上に短いことが分かった。

３０分を過ぎると世にも恐ろしい事が起こると書いてあったことが急に恐くなってきた。

こんな魔法の道具なのだ、きっと時間を守れなかったときには命が奪われるかも知れない…

そんな事が頭の中を駆け巡りながら、とりあえず全裸姿になった亮太の恥ずかしい姿をスマホで撮影した。

結構長い付き合いだが、亮太のチンポを

見るのはもちろん初めてだった。

体育系の連中だと部活の合宿だけでなく、きっと普段の着替えでも互いのチンポを見せ合う機会があるのかも知れないが、

ボクらのような帰宅部には友達のチンポを見る機会なんて修学旅行以外では無かったこともあり、この異常なシチュエーションに強烈に興奮したのだ。

「亮太、オナニーして
　射精するところ見せろ…！」

ビクビクしながら小さい声で命令してみた。

「はい」

亮太はそう言って自分のチンポを握るとシコリ始めた。

時計をチラッと見た。

さっきからまだ２分しか経っていない。

どうやら少し心に余裕が出てきたようだ。初めの１０分は驚くほど一瞬で過ぎたが、落ち着けば時間は有効に使えそうだ。

時間を気にしすぎてじっくり観察出来ていなかった亮太のチンポをスマホのカメラで動画撮影し始めた。

シコシコシコシコ…

淡々とオナニーしている。

スゴい…

同じショボ系仲間なのにボクに対してだけ態度のデカい亮太が目の前でオナニー姿を見せているのだ。

１０代の若いチンポはみるみるフル勃起していく。

やばっ！亮太のヤツ、平常時はドリチンだったのに勃起したら超デカいじゃん…

クチュクチュと皮オナニーして、
亀頭に皮を被せたり剥いたりするする様

子が異常にエロい。

すぐに先走りのヌルヌルが出て来て、仮性包茎チンポの包皮内のションベンと先走りが混じってスゴくイカ臭い。

このままじゃすぐに射精して終わるな…

そう思って時計を見る。まだ余裕がある。

「亮太、オナニーを止めろ！」

「はい」

あと１０秒くらいで射精しそうな勢いでビクンビクンしている亮太のチンポは先走りをタラ～ッと垂らしながら脈打っている。

「亮太、M 字開脚でケツの穴を見せろ」

「はい」

そう言って直ぐに絨毯の上に腰を付けてM 字開脚でケツの穴を見せた。

ヤベエ…超ウケる…

いつもオレを下に見やがって…

その恥ずかしい姿をカメラにしっかり収めてやるぜ…

「よし、次はちんぐり返しになれ！」

「はい」

亮太はすぐにちんぐり返しになるが、
肥満体型の為、すごく苦しそうだ。

これは長い時間は無理だな…

そう思い、恥ずかしいちんぐり返しの姿をカメラに収め、

「よし、次はいつも家でやってるようなオナニーをしろ！」

そう命令してみた。

さっき見たオナニーは何となく機械的で違和感を感じていた。

亮太が普段どんなオナニーをしているの

か、友達の秘密を覗き見たいと思った。

「はい」

そう言うと、亮太は壁にもたれ掛かって両脚を思いっきり M 字開脚にし、右手でチンポを握り、左手を口に入れたかと思うと、その唾液を付けた指をケツにクチュクチュさせながらオナニーを始めたのだ。

「ああ…ああん…キモチいい…ああ…
　オマンコ…キモチいい…」

なんと、まるで女の子のように甘えた口調で喘ぎ声を上げながらケツとチンポを同時にイジるオナニー姿を披露し始めたのである！！！

「ヤベエ…亮太…超ヘンタイ…ウケる」

その恥ずかしいヘンタイオナニー姿を録画しながら見守る。

チラッと時計を確認するが、全然大丈夫そうだ。

「アン…アア～ン…キモチいい…」

そう言いながらクチュクチュとケツ穴をイジりながら皮オナニーで亀頭をムキムキする恥ずかしい音を立てて、次第にその動きが激しくなっていく。

「アッ！イクッ！イクッ！イクッ！！」

どぴゅ！！！どぴゅっ！！！どぴゅっ！

デカい体のイメージ通り、大量の精液が勢いよく飛び出した！！！

うわ～！！！

後始末を考えずオナニーさせたことを
後悔したが遅かった…

友達ではあるが、性の対象として見ていない亮太の精液が部屋の床に飛び散る…

ドロッとした塊も絨毯の上に落ちたのだ…

オナニーを終えた亮太は、気持ちよさそうな表情で余韻に浸っていた。

いつも上から目線でちょっとムカつくところもあるが、亮太のこの表情を見ると、やっぱ憎めないやつなんだよな…
そう思えた。

これが亮太の家での顔か…

やっぱかわいいじゃん…

ぷぷぷ…

それにしても、まさかケツの穴をイジりながらオナニーしてるなんて…

しかもア～ンア～ン…って女の子みたいな猫なで声とかウケる…

「よし、亮太、自分のザーメンを
　ちゃんとキレイにしろ！」

そう言ってティッシュ箱を手渡した。

「はい」

そう言って四つん這いでケツをボクの方に向けて、肛門丸見えのまま自分の精液をキレイに拭き取り始めた。

股の間からタラ～ンと垂れ下がるキンタマ袋や、すっかりドリチンに戻った恥ずかしいチンポ、ケツ毛の生えた肛門をスマホのカメラに収めたのは言うまでも無い。

６　検証を重ねる

その日以来、毎日のように亮太を使って実験を繰り返した。

慣れてくると、２０分を有効に使うことが出来るようになった。

やはり３０分を超えた場合に何が起こるのか想像すると、もの凄く恐かった。

こんな魔法の代償は、『魂』だと
相場が決まっている…

ボクに悪戯されて恥ずかしい姿を晒していると知らない亮太は相変わらずの態度だが、亮太がボクを見下すような態度

を取れば取るほどに、恥辱する時の興奮が高まっていく。

どんな種類の命令が可能なのかを試すと、言葉遣いはもちろんだが、初めに

「ボクをご主人サマと呼べ！
　お前はボクの性奴隷になれ！」

そういう命令も良い感じの恥辱プレイに繋がった。

命令すると、

「ハイご主人サマ」

そう答えるようになる。

そして…

「亮太、ボクのチンポをしゃぶりながらオナニーしろ！ただしボクを口でイカせるまでは射精するな！」

異常なエロさにどんどん理性が壊れていき、超えてはならない領域に足を踏み入れるのに時間は掛らなかった。

性奴隷になるよう命令された亮太は、
ボクのチンポを

「ご主人サマのチンポおいしいです…」

そう勝手に発言しながら
ハムハムしてくれるのだ。

そして…

「亮太、ボクのチンポをしゃぶって射精させろ、そしてボクの精液をおいしそうに味わって飲め！」

完全に暴走していき、生来のドＳの性癖が開花していく。

何の恨みも無いないゲーム仲間の亮太を全裸で恥ずかしいオナニーを披露させるだけでなく、自分のチンポをフェラさせて精液まで飲ませてしまう…

ここまで来たら、次にする事はもちろん決まっている。

ボクのチンポを…

そうやって亮太の体を使い、十分に練習し、時間感覚や、どのように命令すれば効果的なのか検証し、本命の龍輝くんに使う計画を立てていく。

7　作戦

本命の龍輝くんを狙うに当たり、大きな問題がいくつもあった。

まずどうやって髪の毛をゲットすれば良いのか…

坊主頭の野球部の髪の毛をゲットするなんて不可能に近いだろう。

現実的なのはすね毛だろう…

でもイジられることはあっても、こちらから積極的にアプローチする事なんてあり得ない…

友達でない相手から髪の毛をゲットすることがこれほど難しいとは…

野球部は部室で友達同士、バリカンで髪を切るらしい…そこから龍輝くんの髪の毛をゲットする？
いや、混じって誰の髪の毛なのか分かるはずも無い…

色々と考え、一番現実的なのは、
野球部が朝練のあった日に、野球バッグから靴下に絡みついたすね毛を探す方法だと思えた。

次に、家に呼ぶことが出来ない相手をどこで悪戯するのか…

どう考えても家まで連れてくることは不

可能に思える。

そこで、龍輝くんの行動パターンを観察し、ひとりになるタイミングを探した。

人気者の龍輝くんの周りにはいつも友達が囲んでいる。

だから学校帰りを狙うしか無いと考えた。

さらに、土日なら練習が終わって帰宅するときに最後はひとりになるはず…

野球部の練習が終わる時間帯に龍輝くんをストーカーし、行動パターンを分析していった。

8　ウェブサイト

なかなかチャンスが掴めないまま、亮太を悪戯するのに飽きてきた頃だ。

ふと思い出したように、説明書に書いてあったウェブサイトを見てみたくなった。

チャットで質問出来るとあるが、どんなふうに答えてくれるのだろう…

ドキドキしながらＵＲＬを入力する。

表示されたページは驚くほどショボく、あの紙に書かれていた説明文があり、ページの下に『質問はこちら』と書かれた

チャットページへのリンクがあるだけだ。

個人情報が抜かれるかと警戒したが、拍子抜けするほど幼稚な作りに驚いた。

さっそく質問チャットページに入力する。

「こんにちは」

「こんにちは」

即答だ…

「質問して良いですか？」

「はい」

いざ質問しようとすると、何から聞いたら良いのか思い付かなかった。

とりあえず一番気になっていたことを聞いてみる。

「３０分を過ぎたらどうなりますか？」

「世にも恐ろしい副作用が襲いかかります」

「死ぬということですか？」

「世にも恐ろしい副作用です」

「じゃあ、死ぬことはないですか？」

「世にも恐ろしい副作用です」

「世にも恐ろしい副作用とは、具体的にどのような事ですか？」

「世にも恐ろしい副作用です」

『ダメだこりゃ…』

このチャットは自動のチャットボットで、個別の質問には答えられないものかもしれない…

諦めて質問を変えてみた。

「操り人形にしている間の記憶は完全に無いのですか？」

「ほとんどありません」

『えっ？　ほとんど…？』

「少しは記憶が有るということですか？」

「ほとんどありません」

「どれくらい記憶が残りますか？」

「ほとんど残りません」

おっ！返事が変ったぞ！！

質問を工夫すれば何かヒントが得られるかも知れない。

「夢で見ることはありますか？」

「ほとんどありません」

完全に無いと言い切ってない…？

「完全に、完璧に記憶から消えると断言出来ますか？」

「断言出来ません」

「少しは残るんですね？」

「起きたことは脳が記憶しています」

「脳が記憶しているとはどういうことですか？」

「脳は、体験したこと見聞きしたことを全て記録する機能があるということで

す。」

「では、解除した後も、その記憶は脳に残っているのですね？」

「はい、脳は体験したこと、見聞きしたことを全て記録する機能があります。」

「では、解除した後にその時の記憶が残っているということですか？」

「脳には記憶が残っていますが、解除を行うと、その記憶を引き出す能力を抑えるため、ほとんど思い出すことがありません」

「無意識では記憶が残っているということですか？」

「はい、無意識では全て記憶が残っています」

「じゃあ、バレる可能性がありますか？」

「ほとんどありません」

ボクは、このチャットが自動ボットでは無いと思えて来た。

「操り人形の間に命令した事が
　脳に無意識で残っているなら、
　解除した後の行動にも
　影響を与えますか？」

「大抵はありません」

「完全に１００％無いと
　断言出来ますか？」

「完全に１００％無いとは
　断言出来ません」

「なぜですか？」

「脳内にその命令が残っているためです」

「例えば、解除後の行動を命令することは出来ますか？」

「出来ますが、それが実行されるかは
　相手次第です。」

「相手次第とはどういう意味ですか？」

「無意識の行動は、
本人の意思とは関係なく
行われるものです。
その無意識の命令が強く作用するか、
弱く作用するかは相手次第です」

「繰り返し命令し続けると、
強く作用するという事ですね？」

「無意識への命令を繰り返すことで
暗示が強くなる可能性は高まります」

「あなたは人間ですか？」

「はい、人間です」

『!?』

ボクは思わず息を飲んでしまった。
機械的な答え方だが、チャットの相手は本当に人間なのかもしれない…

「また明日、いろいろと質問してもいいですか？」

「はい、いつでもお待ちしております」

チャットを終え、混乱する頭の中を整理していた。

全ての記憶は有るけど、
無意識の記憶だから
覚えていない…？

ネットで『無意識の記憶』でググると、ユングという心理学者の学説が出てく

る。

なるほど…

チャットで言われた内容が理解出来た気がした。

脳は見聞きした全ての情報を記憶しているが、不必要な情報は、どんどん脳の奥の方に仕舞っていき、殆ど思い出すことは無い。

学校のテストで暗記系科目が得意な人は、その記憶の引き出しを上手に使える人。

もともとオタク気質で、興味を持つとトコトン調べたくなるボクは、無意識の領

域についての記事を読みまくっていった。

結論は、人間の行動は殆どが無意識の領域で支配されているという事。

毎日の生活の中、習慣化された行動は、脳がエネルギーの節約で、過去の映像を表示している事も分かった。

だから家の中で、いつもは無いものが床にあると、見えているはずなのに、その映像が脳に表示されず躓いてしまう。

無意識の領域を支配出来れば、もしかすると、あの人形の効果を解除した後の行動にも影響を与えることが可能かも知れない…

そんな興奮で妄想が広がり、その日は朝方まで寝れなかった…

9　無意識の領域を支配する実験

龍輝くんの体毛をゲット出来ない間に、亮太を使ってさっそく実験開始だ。

いつものように催眠状態でフェラをさせたり、ケツを掘ったり、オナニーさせて辱めるプレイをするのだが、その時に、命令を工夫してみた。

「亮太、ボクのチンポがおいしくて堪らなくなって、ケツを掘られるのが気持ちよくて堪らないから、毎日、ケツを掘ってもらいに来い！」

日本語に無理があるが、最後は命令で終われば効果があることは検証済みなの

で、足りない頭をフル回転させて命令していく。

何回くらい暗示を掛ければ効果あるのかな…と、気長に構えていると、なんと、翌日には呼んでもいないのに、学校帰りに直接遊びに来たのだ。

「え？学校帰り、珍しいね…？」

「ああ、いったん家に戻って来るより直出で来た方がたくさん遊べるだろ？」

亮太は、少しムッチリ体型で汗っかきのため、家に帰ってシャワーを浴びた後じゃないと来ないタイプだった。
体臭を気にしているからだ。

まさかこんなにダイレクトに暗示か効くなんて…

ボクは興奮してすでに勃起していた。

制服姿でいつもと違うシチュエーションにドキドキだ。

隣に並んで座り、ゲームコントローラーを握って画面を見ていると、隣に座っている亮太が、珍しくボクに太ももをくっ付けて来て、肩の密着度もいつもと違う。暑がりで汗っかきな亮太にはあり得ないことだった。

ボクはそれに気付かないフリをしながら、ゲームの設定を続ける。

ボクのビンビンのちんぽが制服のズボンの股間でテントを張っている。

その股間に亮太の熱い視線を感じる。

汗っかきの亮太の体臭がツ～ンと臭ってくる。亮太は気にしているその体臭だが、ボクは気にならない。むしろ安心感を覚える匂いだ。

いつもと違う、興奮して鼻息の荒い亮太の雰囲気に圧倒されていた。

もしかして、あの人形を使わなくてもイケるんじゃないのか…？

そんな気さえしてくる。

チラッと亮太の股間を見ると、
ビンビンに勃起しているのが分かる。

平常時はドリチンだが、勃起すると結構デカい為、学生ズボンだと思いっきり勃起した状態が丸わかりだ。

亮太の性格なら、もし勃起していたらさり気なく隠すはずだが、そんな様子もなく、同じくフル勃起でビンビンのボクの股間を凝視しているのだ。

ドックンドックンと、どっちの鼓動なのか分からない心音が部屋に鳴り響いているように感じた。

耐えられなくなり、

「なんか今日、アッチイな～」

「あっ、ああ…そうだな…」

亮太は我に返ったようにボクの言葉に反応し、顔を赤くした。

「いつもは亮太、家に帰って来るからさ、その間にボクもシャワー入って着替えてるけど…」

「あっ、ご、ごめん…」

亮太はニオイを気にしてシャツをクンクンしている。

「あ、違うって！
　直接来た方がゲームも

　長く出来るじゃん！
　だから次も今日みたいに
　直で来た方が絶対いいよ！」

そして…

「ただ暑いからさ、
　ズボン脱いどくな。
　どうせ男同士だし…」

そう、ドキドキしながら言ってみる。

これまでのボクのキャラからは、
そんな体育系男子のような
言動は似合わない。
かなり不自然で無理のある発言だ。

だが何度も亮太のケツを掘って

気が大きくなっていた事もあり、
あの龍輝くん達のグループの
男らしい口調をマネして言ってみた。

「あっ…ああ…うん…」

亮太らしくない、ゴクリと喉に何かを詰まらせたような返事だ。

そしてボクは、サッと学生ズボンのベルトを外し、スルッと脱いでトランクス姿になった。

ついでに上も学生ワイシャツを脱いでＴシャツだけになる。

トランクスの股間部はビンビンに勃起させたまま、さっきと同じ位置に座った。

１～２ｃｍは距離を置いて座ったが、コントローラーを握ってゲームの設定画面をイジっていると、亮太が直ぐに密着して来た。

薄いトランクスでテントを張り、大量の先走りで濡れ濡れの股間に熱い視線を感じる。

亮太の荒い鼻息や、汗、心臓の鼓動が
もたれ掛かるように密着してくる肩から伝わってくる。

ボクはトランクスの前開きからチンポを取りだしてオシッコするタイプなので、普段からボタンを外していた。

その習慣が幸いしたのだ。

持ち上がった肉棒によって、トランクスの前開き部分が思いっきり開いている。

どうやら亮太の角度からは、ボクのチンポの肉の色や、陰毛などが見えているようだ。

「う～ん、このマップは
　昨日やったしな……、
　あ、このマップは有料か…」

そう独り言を呟いて、亮太の視線に気付いていないフリを通す。

亮太の密着度合いがさらに増してくる。

「あ、亮太、お前も暑かったら
　脱いで良いぜ」

そうサラッと言うと、

「あっ、そうだな…オレも暑いから…」

そう言って張り切ってボクと同じように下はトランクス、上はＴシャツ姿になり、またボクの隣に座った。

嗅ぎ慣れた酸っぱい亮太の汗の臭い…
ボクに対して上から目線で態度もデカくイラッと来るところもあるが、亮太といると気が楽になる。
亮太は結構気にしてるようだが、ボクはそんな亮太の体臭が嫌いじゃなかった。

ボクに安心感を与えてくれる亮太の体臭に混じって、先走りとションベンの入り交じった包茎チンポ臭がツーンと鼻を刺し、股間が熱くなるのを感じる。

思わずチラッ、チラッと亮太のデカい股間に目が行く。大量の先走りでヌルヌルに濡れたトランクスの薄い生地が、その下のデカい肉棒にピタ～ッと張り付いて透けて見えそうだ。

ここまで来ても、臆病なボクは自分から行動は起こせない。

亮太から悪戯してくるのを待ち続ける。

いつも上から目線で、ボクにだけは横柄な態度を取ってくるのだから、そのノリ

で強引にボクのチンポを取りだして
しゃぶってくる状況を待っていた。

もう不自然なくらい、設定画面をカチカチと切り替えてマップ選定とタイトル画面を行ったり来たりを繰り返すが、猛獣のような亮太の熱視線は、ずっとボクの股間に熱く注がれているだけで、なかなか次のアクションを起こしてくれない。

さり気なく腰の位置を動かすそぶりをしてトランクスを少しズラしてみた。

そうやってボクの勃起チンポをトランクスの前開きから丸出し状態にしようと目論んだのだ。

「暑いから、電気消しとくぜ…」

そうさり気なく呟いて、テーブルの上のリモコンで天井のライトをオフにした。

外の陽の光や、大画面の明かりで十二分な視界は確保出来ると思った。

しかし、急に明かりを消したため、目が慣れるまで一気に視界が暗くなる。
ちょうどいい！
そのタイミングで、ゆっくりと腰をずらしていって、フル勃起のボクのチンポをトランクスの前開きから飛び出させる事に成功した。

少しだけ肉棒にトランクスが引っ掛かっている感じに出来ているが、亮太の角度からは完全に丸見え状態のはずだ。

ときどきビクン！と肉棒を動かしてアピールしてみる。

チラッと亮太の股間を見ると、大量のガマン汁で濡れてスケスケになり、その下のデカいペニスがビクンビクンと大きく動いている。

『はやく…！　亮太…
　ボクのチンポしゃぶれ…！！』

そう思いながら、鼻息だけが荒くなって強く密着してくる亮太の汗を感じながら、ボクも耐えきれず、さらにクイッとチンポに力を入れて、ギリギリ引っ掛かっていたトランクスを完全に払い落とした。

勃起しても手で剥かないと剥けない包茎チンポを、ついに丸出し状態にして見せつけたのだ。

ハア…ハア…

包茎チンポの先っぽからダラダラと先走りが溢れ続けている。

『早く…早くボクのチンポをしゃぶれ！』

そう思いながら待ち続けるが、亮太は肩や太ももを押しつけて、デカい股間をビクンビクンと動かすだけで、鼻息はドンドン荒くなっていくのに、全く手を出そうとしない…

その状態がしばらく続き、ボクのガマンが限界に来たところで諦め、側に隠して置いた人形を強く握った。

１０　無意識の行動を支配する

もう十分に変態なシチュエーションを味わい、興奮マックスだったボクは、亮太に命令してチンポをしゃぶらせ、ケツを掘りながら、亮太が女の子のように
ア～ンア～ンと恥ずかしい喘ぎ声を上げながら手で扱いてオナニー射精する姿を堪能した。

プレイが終わり、次にどんな暗示を掛けるべきか考える。

前日の命令はこうだった。

「亮太、ボクのチンポがおいしくて堪らなくなって、ケツを掘られるのが気持ち

よくて堪らないから、毎日、ケツを掘ってもらいに来い！」

この一度命令した暗示はいつまで効果を示すのだろう…
同じ命令を繰り返した方が、より強い暗示になる気もするが、今回は、より具体的な命令を加えてみた。

「亮太、明日もボクのチンポがしゃぶりたくて堪らなくて家に来い、そしてボクがトランクス姿になったら、冗談っぽく悪戯するようにボクのチンポを取りだしてしゃぶれ！そして自分からケツの穴を掘って良いぜって、パンツを脱いでケツの穴を見せろ！」

そう命令してから解除した。

人形の効力を解除すると、ボクのチンポをしゃぶり、さらにケツを掘られながら女の子のように恥ずかしい喘ぎ声をあげ、気持ちよく射精したお陰だろうか？

すっかりエロモードから解放されたように、いつもと変らない亮太に戻ってゲームを楽しんで帰って行った。

無意識には記憶されているというが、果たして亮太は、操られている間のプレイの記憶はどれくらい認識出来ているのだろう……

翌日も亮太は学校帰りにそのままやって来た。

その時点ですでにデカい亮太の股間が固くなっているのが分かる。

昨日と同じ位置に座ると、さっそく密着して来た。
昨日と同じ段取りでボクはトランクスとＴシャツだけになる。

すると亮太もすぐに同じ姿になった。

もうドキドキが止まらない…

『早く来い…早く来い…』

そう思いながらゲームの設定をカチカチしていた。

今日もしっかりトランクスの前開き部分

を思いっきり開いて、フル勃起ちんぽが昨日よりも見えやすくしておく。

やはり臆病なボクは、自分から完全にチンポを取りだす勇気は無い。

あくまで、気付かないうちに偶然ちんぽが見える状態になっている…
そういう体を演出しておきたかった。

昨日と同じく、熱い視線を感じながら待っていると、

「おい、マコト～お前チンポ出てるぞ！」

「えっ？あ…」

予想外の言葉に顔が赤くなる…

あれ？予想と違う…

「なにビンビンに勃起させてんだよ…
　しかも超包茎じゃねえかよ～ｗｗ
　お前、もしかして真性包茎なのか？」

違う…想定と違う…

くっ…悔しい…

プライドの高いボクは顔を真っ赤にして
トランクスの前開きから飛び出して固く
なっているチンポをクイッと肘で隠し
た。

「何、いまさら隠してんだよ、
　もうバッチリ見ちゃったもんね～」

そう言ってバカにしながら強引にチンポを握ってきた。

「お、おい、やめろバカ…」

「いいじゃん、別に…
　あっ…メチャクチャ
　先走り出てるじゃん…
　マコト、なに興奮してんだよ…
　お前ってやっぱドＭだなぁ…ｗｗ」

そう言ってバカにしたように笑いかける。

そしてチンポを握って被った包皮をゆっくりと剥いていく…

「おお～真性包茎っぽいけど
　剥けんじゃん…うわ～
　超チンカスクセえ～」

屈辱で顔が真っ赤になっていた。

そのまま体のデカい亮太がゆっくりとボクのトランクスを脱がしていく。

「おっ、おい！何やってんだよ、やめろ」

「いいじゃん別に…
　こんなに先走り垂れ流して、
　本当は期待してんだろ…？」

さっきまでのバカにしたような表情から一変し、興奮した肉食動物のような真剣な表情になっていた。

そのまま床の上に寝かされ、トランクスを完全に脱がされてしまう。

「フゥ～フゥ～」

と鼻息荒くボクのチンポに顔を近づけて観察しているのだ。

「マコトのチンポ、超エロいな…」

「おい…やめろって…ハズい…」

心にも無いセリフを吐く。

『早く口に咥えろ！操られていない状態でボクのチンポを咥えろ！』

そう念じる。

「亮太もパンツ脱いでチンポ見せろよ」

「フウ…フウ…」

混乱したように難しい顔をしてフリーズしている。脳内で葛藤しているようだ。

「ボクもチンポ見せたんだから
　亮太も見せろって…友達だろ？」

「…まあオレの方がデカいし…」

そう小さく呟き、混乱した複雑な表情のまま何かに抵抗しながらパンツを脱いだのである。

『スゲえ…人形使わなくても操れるじゃん！！！』

興奮したボクは、この後の展開を期待する。

『早く咥えろ！』

鼻先までボクのフル勃起チンポに顔を近づけ、仮性包茎チンポの皮を剥いたり被せたりして無言でガン見している。

「おい、亮太のチンポ見えないって…」

そう言うと、亮太は黙ってボクの顔の方にチンポを持ってきて四つん這いに跨がった。

「亮太、超デカいじゃん！」

見慣れたデカいチンポを初めて見て興奮しているように大げさに演技する。

そして亮太のチンポの皮を剥き剥きして刺激する。

「うっ！　勝手に触んな！
　アッ…おい…アッ…アン…
　…あまり強く刺激すんなよ…
　出たらお前の顔にぶっ掛けるぞ…」

そしてさり気なく亮太のケツの穴に指を這わせた。

「あうっ！ケツはやめろ！」

亮太がケツ穴いじりが好きなのを知っているボクはお構いなしに亮太の大量の先走りを指に絡ませて、ケツの穴にクチュクチュして押し込んでいく。

何度もボクにケツを掘られた亮太の肛門は、ちょうどボクのサイズにパカッと大きく口を開くのだ。

「あっ…あっ…やめろ…変態…」

「いいじゃん、ケツって気持いいだろ？」

「お前がその気ならオレも…」

そう言うと、パクッ！！！

『やったー！！！』

遂に堕とした瞬間だった。

人形で操り人形にしている時ではなく、シラフな状態で、完全にノンケの亮太に男のチンポを咥えさせることに成功したのだ！！！

やばい…超キモチいい…

なんども経験している亮太のフェラだが、意識を持った状態でのフェラはひと味もふた味も違って快感だった。

その気持ちよさを味わいながら、亮太のデカいチンポから大量に零れ落ちるガマン汁を余すことなく指に塗り込んで、それを亮太のケツの穴にズプズプと入れて

あげた。

自分の先走りをケツの穴に塗り込まれているなんて気付いているだろうか？

きっとボクの唾液でズプズプされていると勘違いしているかも知れない…

そう思うと亮太が可哀想で、異常に興奮してくる。

ああ…やばい…亮太のフェラでそのままイキそう…

そう思ったときだった。

「おい、亮太のチンポちっちぇからよ、
　オレのケツに

入れてやっても良いぜ…」

『ゴクリ…』

そしてそのまま何も言わず体勢を変えると、なんとボクを床に寝かせたまま、騎乗位でケツにチンポを差し込み始めたのだ…

『やべえ…亮太が…』

シラフな亮太がこんな事をするなんて絶対に考えられない事だった。

スゴい…あの人形って、解除した後の行動まで完璧に支配出来るって事じゃん…

「ハアァ…ハアァ…やばい…やばい…」

そう気持ちよさそうに騎乗位で腰を上下に動かし喘ぎ声を上げている。

「ハァ…アア…ン…ハア～ン…ハア…」

亮太の本当の喘ぎ声を知っているボクは、女の子のような恥ずかしい喘ぎ声を必死で堪えている亮太の姿に興奮した。

亮太はボクのことを格下に見ているから、ケツを掘られながら女の子みたいな喘ぎ声を出す姿なんて見られたく無いのだろう。

ぶちゅブチュぶちゅぶちゅ…

イヤらしい音が鳴り響く。

そして亮太が自らのチンポを握って扱き始めた。

「アア…ン…アアン…キモチいい…」

少しずつ本来の喘ぎ声を交えながら、右手はデカい肉棒をシゴキ、左手で乳首をクリクリしながら腰を動かし続ける。

『うわ！亮太のヤツ、ケツだけじゃ無くて乳首までイジってオナニーしてんのか!?』

新たに知った亮太の変態な姿に興奮と快感がすぐに最高潮に近づいていく。

「やばい！亮太！ボクイキそう！！！」

「オレもイク！イク！！！」

ドピュ！ドピュ！ドピュ！！！

なんとボクは初めて亮太のケツの中に精液を発射してしまった。

これまで何度もケツを掘っていたのだが、わずかに残された良心がブレーキになっていた。

ボクのことを友達だと思っている亮太を操って性処理のオモチャにしている。

そんなボクに僅かに残された良心が、
中出しだけはダメだ…
そう思って必ず外出ししていた。

亮太の大量の精液がボクの腹部や胸にぶっかかっていた…

温かいドロッとした感触が気持ち悪かった…

ドＳで、友達を一方的に悪戯することに快感を覚えていただけだと、その時に初めて気付いたのだ。

男の精液を自分の体にぶっ掛けられるのがとても気持ち悪く感じた。

「ふう…」

カラダの大きな亮太が大きくイキを整えると、そのまま覆い被さって抱きつき、

なんとキスをしようとしてきた。

さすがにそれにはゾワッとして
口を固く閉じて顔を背けた。

「あっ…ごめん…」

亮太はボクのその反応に悲しそうな表情を浮かべた。

「あっ、違うって！そうじゃなくて、
　キスとかはさ…ほら、
　ファーストキスは…」

「あっ…うん…」

ノンケの亮太をこんな風にしたのはボクなのに、胸が苦しくなった。

「ホント違うから…
　イヤとかじゃないって…それに
　ボクの童貞は亮太にあげたんだから…
　それでいいだろ？
　ボク、亮太なら全然ＯＫだったし…」

「あっ…そっか…
　マコトの童貞はオレが
　ゲットしたって事でいっか…」

そう言って苦笑いした。

少し気まずい感じだった。

亮太は、なぜ自分がこんな事をしでかしたのか分からないような混乱した表情で放心状態になっている。

純粋な友情を向けてくれている大切な男友達の亮太の悲しそうな表情に胸が締め付けられた。

二人ともパンツだけは穿いて、
無言でゲームの設定画面を眺めていた。
亮太の横顔がとても悲しげだ…

ボクはあの人形を強く握っていた。

ボクとセックスすると
気持ちが晴れやかになって、
また次の日もセックスが
したくなるんだ！
そして、終わった後も、
楽しいゲームをし終えたような
明るい気持ちになれ！

亮太は亮太らしく、いつも通り
ボクに対して上から目線で
ノリ良くエッチな悪戯をしてこい。
そしてチンポをしゃぶると
スゴく幸せな気分になるんだ！
ケツを掘られるたびに
ハッピーで前向きな気分になるんだ！

そう暗示を掛けてから解除を行った。

すると、亮太はさっきの暗く沈んだ表情が嘘のように明るくなり、

「さっきのエッチ、超気持ちよかったな！
　明日もやろうぜ！
　それにしてもマコトのチンポ、
　超小っちゃくて可愛いからよぉ
　なんか無性にしゃぶりたくなるぜ！

マコトに彼女出来るまではオレが
相手してやるよ！
どうせそんな小っちぇ包茎チンポじゃ
当分は使い道ねぇだろうからよ！
ホント、マコトって見た目通りだよな
すっげえチンカスくせぇしｗｗｗ」

突然人が変ったように豹変した。

ボクを下に見て、チンポが小さいとか、包茎でチンカス臭えとイジってくる辺りがいつもの亮太に思え安心した。

これもあの人形の暗示で操られているようにも思えるが、でもこういうイラッと来るような言い草は、本来の亮太と変らない。

それでも亮太の友情を裏切っているような罪悪感もある。だって本来のんけの亮太にホモセックスさせているのだから…

せめてボクが格下で、亮太が自らの意思でボクを辱めているという上下関係を設定しておこう…

この人形の効果がいつまで続くのか分からない。

髪の毛を取り去った後はどうなるのだろう…

いずれ龍輝くんの体毛をゲットしたときには入れ替えるのだ…

今夜はそのことをチャットで聞いてみよ

うと思うのだった。

１１　チャットに質問

「こんにちは」

「こんにちは」

「今日も質問して良いですか？」

「はい」

本当に向こうには人間がいるのだろうか？とても機械的で、しかも即座に返事が返ってくる。やはり自動ボットなのかもしれない…

「あの人形で操っているときに命令したら、解除した後も効果がありました。」

「……」

あれ？

「あの？繋がってますか？」

「はい、繋がっています。」

質問する感じで聞かないとダメなのか？

「人形で操っている時に命令した事は、解除した後も効果があるんですか？」

「はい、認識していなくとも、脳には記憶されています。相手の意識が無意識の領域に記憶された命令と近い場合には効果が出る場合もあります。」

あれ？めっちゃ詳しく教えてくれてる…
急にどうした⁉
それに前回と少し言ってる事も違う？

「今日、友達に命令したら、解除した後の行動を完璧にコントロール出来ました。その友達が、命令された内容を普段から望んでいたということですか？」

「全く望んでいない命令ですと、
　解除作業の後、それが作用することは
　殆どありません。しかし、
　繰り返し命令し続けたり、
　もともと持っていた願望と
　重なっていた場合には
　効果が出る場合もあります。」

「もう少し詳しく仕組みを教えてくれま

すか？」

「はい、よろこんで。
人間の行動は意識、無意識に分けられます。普段の行動は全て意識して行われていると思われがちですが、実際は、９割以上の行動が無意識に支配されています。人形で催眠状態の時の記憶は、解除後に完全に無意識の領域に送られますが、その無意識の記憶が繰り返されることで、その人の行動に影響を与えることが考えられます。」

えっ！なんか前と全然違う…

前回、殆どノーヒントに近い機械的な反応だったが、今回はスゴく親切…

「すごく分かりやすいですありがとうございます。前回より詳しく教えてくれて嬉しいデス。前回と別の人ですか？」

「はい、満足して頂き嬉しいです。
　前回と同じ人です。」

「なぜ前回よりもこんなに詳しく教えてくれるんですか？」

「はい、人形を使う回数が増えるほど、より詳しくお答えする事が可能になります。」

ぞわっ…

急に背筋に冷たいものが走った。

そうだ…こんなヤバイ人形なのだ…

必ずなにか代償があるはず…

きっと油断させて３０分以上使わせて魂を抜き取るつもりだな…
そうはさせるものか…！
だから念のために２０分って
決めてるんだ！
あ、そうだあのことを聞いておこう。

「操り人形に入れた体毛を取ったあとでも、暗示は無意識に残り続けますか？」

「はい、人形の効果と、脳の無意識の領域への記憶は別です。体毛を抜いた後はコントロールは出来なくなりますが、その間に命令した暗示や、無意識領域に書

き込まれた映像記憶は脳に残り続けます。それが相手にとって重要で無ければ次第に記憶の深い領域に押しやられ、行動に影響を与えることも無くなって行くと考えられます。」

めっちゃ詳しく答えてくれるじゃん！！

「じゃあ、もしほんの少しでも３０分を超えたらどうなりますか？」

「世にも恐ろしいことが起こります」

「その世にも恐ろしいこととは具体的にどのような事ですか？」

「世にも恐ろしいことです」

「死ぬということですか？」

「世にも恐ろしいことです」

だめだ…

どうしてもこれだけは教えないつもりだな…

この人形の最終目的は、欲でうっかり時間オーバーさせて魂を抜き取ることに違いないから、何が何でも教えることは無いんだろうな…

へへ…ボクを騙そうったって無駄無駄！

ボクは用心深いんだ。

この人形をずっと上手く使いこなせればきっと大金持ちにだってなれるはず。

でもそれは後々で良い。

今は今を楽しまなくっちゃ！

そしてチャットを終え、ベッドに横になる。

１２　人形のニオイ

へぇ…亮太って実はボクのことエッチな目で見てたのかな…

亮太って実はホモだったって事か？

そういや、初めにいつも通りのやり方でオナニーしろって命令したら、ケツを指でイジりながら女子みたいにア～ンア～ンって、猫なで声でシコってたな…

でも亮太って２次元のアニオタだし…ホモな訳ないか…

やっぱ何度もホモセックス強要したから無意識にそれが気持ちよくなっちゃった

だけだよな…

そう考えるとちょっと寂しい気がした。

亮太に対しては、ゲーム仲間、只の男友達で全く性的な興味の対象でも無かったし、それどころか、同じショボいオタク系なのに、ボクの前でだけ態度がデカい…

学校ではもの凄く大人しくて目立たない気が弱そうな感じなのに、ボクとふたりの時だけ完全に別人のように豹変するのがムカつくくらいだった。

それでも、他のゲーム仲間とはオンラインでしか遊ばないが、亮太だけは実際に家に呼んでゲームをする仲だ。

ムカつくところはあるのに、一緒に居て落ち着くし、全く気を遣わずにいられた。

亮太の髪の毛が入った人形を手に取って眺めてみる。

そして何気なしに臭いを嗅いでみた。

『あっ！』

亮太の臭いだ…

あの、少し肥満気味の亮太の酸っぱい体臭…

ボクは気にならないが、亮太はすごく気にしている肥満児特有の体臭…

小学校でデブ体型でイジメの経験がある亮太は、スゴく臭いに気を遣っていた。

だから必ずシャワーに入ってから遊びに来ていたのだ。

他の人には臭いと感じる亮太の体臭だが、ボクは初めて会ったときから、なんだかホッとする臭いだと感じていた。

酸っぱい肥満児だった頃の亮太を思い出して臭いを嗅いでみる…
う～ん落ち着く…

そして人形の股間を嗅ぐと、ツーン！と鋭いションベンと包茎チンポの臭いが鼻を突き刺した。

すげえ…

亮太のチンポの臭いじゃん…

そのリアルな体臭が再現された人形を鼻に押しつけ、いつの間にかチンポを握ってシコシコしていた。

亮太…

シコシコシコシコ……

亮太がキスしようとしてきたシーンが蘇る…

そしてキスを拒んだときのあの悲しそうな表情に胸がキュ～ンと締め付けられる

…

ボク…いつの間にか亮太が好きになってたかも…

シコシコシコシコ…

アッ…アッ…亮太…イクッイクッ！！

ぴゅぴゅ！ぴゅぴゅ！！

思いっきり亮太のチンポの臭いを鼻に押しつけながらフィニッシュしていた。

自分の恋に気付いた戸惑いとトキめき、そして、亮太の想いが人形の暗示によるものなのか、もともと秘められたものなのか確かめたくなって行く。

この人形の背中から亮太の髪の毛を抜いたらどうなるんだろう…

もしかしたら、また普通の男友達に戻っちゃうのかな…

そんな余韻に浸っていると、次は龍輝くんの姿が頭に浮かんできた。

１３　危険な妄想

憧れと嫉妬の入り交じった想いが高まる。

あの男らしい表情、言葉遣い、バッキバキの筋肉…

女子からも男子からも人気者の龍輝くんを思いっきり辱めて、ボクのチンポをオイシイオイシイってしゃぶらせてやりたい…
そしてケツの穴に何度も何度もズプズプして、ボクのチンポの大きさにパックリ広げてやるんだ…

亮太に対しては、大切な友達という感情

でブレーキが掛っていたが、龍輝くんに対しては違った。
憧れと嫉妬…
コラ画像を作ってオナニーのおかずにしたり、ずっと妄想で辱めの対象だった事もあり、イメージを壊してしまうくらいの恥辱プレイを妄想してしまう。

男らしくてカッコいい龍輝くんが、全裸姿で犬のようにボクのチンポをペロペロする姿を思い浮かべる。

そして普段どんなオナニーをしているのか命令して、その姿を録画してやる…

ボクのちんぽがキモチいいって何度も言わせて無意識の領域に擦り込んでいこう。

そうだ、ネットで調教道具やケツにズブズブするヤツとか買って、ガバガバの恥ずかしいケツマンコにするのも良いな…

次から次へと危ない妄想が沸き起こり、今フィニッシュしたばかりのちんぽが直ぐに復活して来た。

ああ…早く憧れの龍輝くんのチンポ見てみたい…
どんなチンポなのかな…
やっぱチンポもイケメンなのかな…
あんなに堂々としてるから
ズルムケでデカいのかな…

カッコいい野球部のオナニーする姿…

あの筋肉質なデカいケツをグイって左右に広げてケツの穴を観察してやるんだ…

パックリ開いて鯉の口みたいにパクパクしている様子を思い浮かべる。

またチンポを握ってオナニーしたくなったが、どっと疲れが襲ってきた。

明日は亮太との関係が少しでも長続きするように、いっぱい暗示を掛けて…

そして憧れの龍輝くんの
恥辱開始Ｘデイに向けて妄想を膨らましながら深い眠り落ちていった。

vol.1 おわり

vol.2 に続く…

あとがき

本作は、南国球児久しぶりの本格的な？小説作品として取りかかりました。
私自身は、ちょっと複雑なストーリー展開が好きですが、やはりエロ作品ですのであまり難しくないシンプルな方が好まれるかと思い、最近の作品は複雑なストーリーは避けていましたが、これまでの作品のトータルの売り上げを集計すると、予想外に複雑？なストーリーものの方が好まれている結果でした。

そこで前々から構想とスクリプトだけ書いてあった本作に取りかかりました。
小説だけで１冊にまとめるか、適度に分けておまけイラストも付けるか迷いまし

たが、新しい作品から南国球児作品に触れた読者さんはミニ漫画があるのを期待していると思い、適度に分けて仕上げています。

南国球児作品では主役級のキャラはほぼ野球部や、体育系の体型が多いのですが、今回は初めて主役級を可愛いぽっちゃり君にしています。

設定が高校生なので、ぎりぎりのリアリティーを残しつつ、出来るだけ可愛さも描いてみました。

主人公のマコトに対して、小学校でイジメを受けて心を閉ざしている亮太にとっては、マコトは唯一心を許せる大切な存在です。本編でも書いてあるように亮太

は完全なのんけで、マコトに対しては大切な親友として見ており、性的な興味の対象ではありませんでした。アニオタでオナニーのおかずは常に二次元のアニメの女の子です。しかもオナニーするときには、その女の子になりきってお尻の穴に指を突っ込んだり、乳首をクリクリして一人二役でエクスタシーを味わっていました。
決して男にケツを掘られたい願望があるわけでは無く、ケツをクチュクチュするのは女の子のマ○コを悪戯しているイメージ、乳首も同じく女の子の乳首を悪戯して感じているのを楽しんでいるのでした。

それがときどき夢で親友のマコトとセックスするイメージを見始め、戸惑いを感

じ始めているのです。
意識には無く、無意識の領域に刻まれたマコトとのキモチいいセックスの映像が夢の中で再現され、目覚めとともに消えていく…
それを日々繰り返す…

続編ではついに龍輝くんの体毛を手に入れ、親友の亮太への遠慮とは違い、歯止めの効かない恥辱調教にハマって行きます。

人形のコントロールから解かれた亮太との関係がどうなっていくのか…

続編をおたのしみに！

２０２３年７月

南国球児

のんけ調教シリーズ

恥辱のあやつり人形

偶然手にした不思議な人形
のんけの幼馴染みに悪戯して…

vol.1

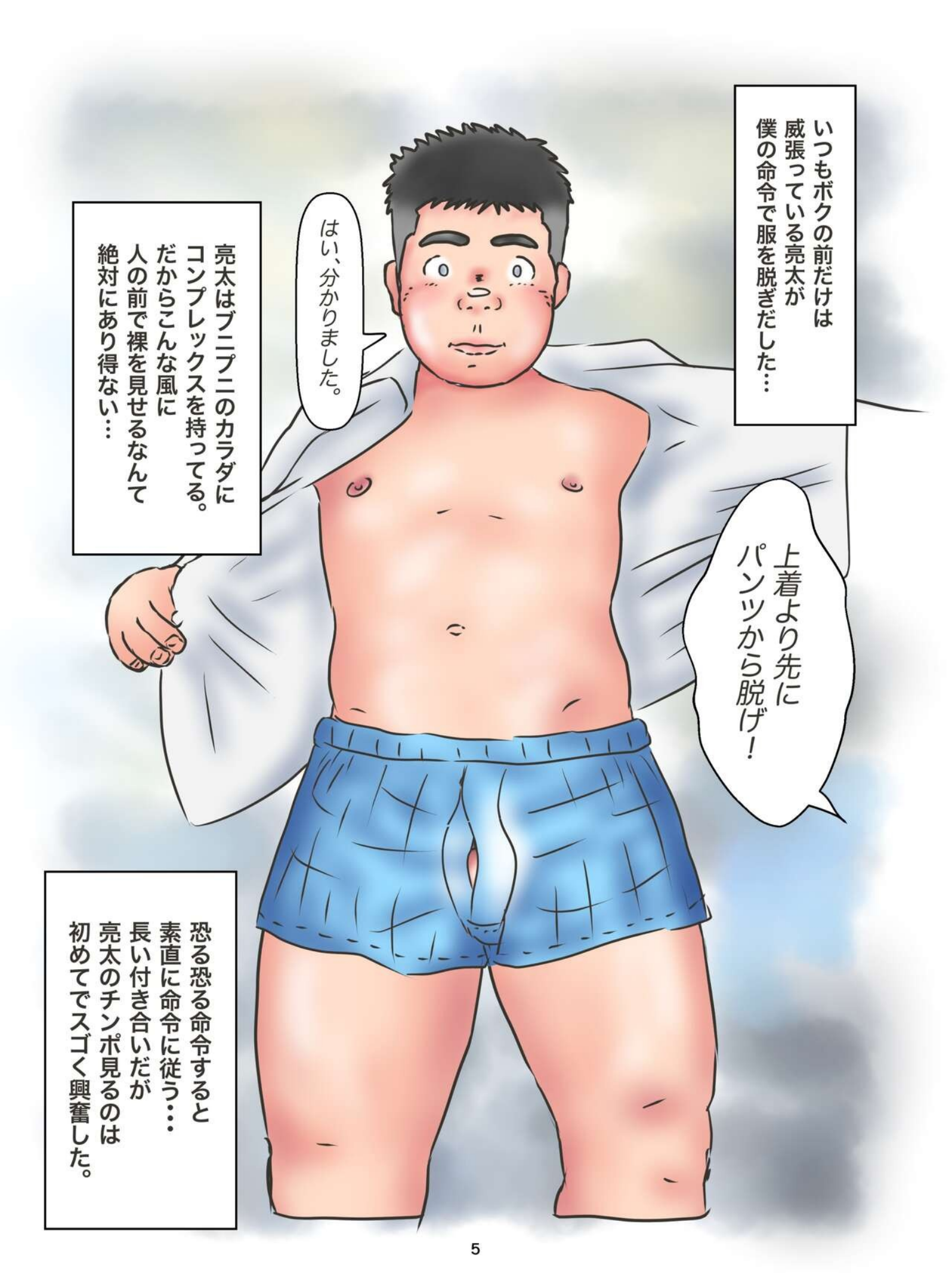
南国球児

はじめに

このイラスト、ミニ漫画は、小説のおまけとして制作したものです。
漫画単体として楽しむことを目的とはしておりませんが、
出来るだけ小説をより楽しめるように工夫してみました。
南国球児作品では珍しくぽっちゃり君を描いています。
小学校時代にいじめられていて、大人しい亮太ですが、
唯一心を許せる親友のマコトの前だけは別人のように
態度や言葉遣いが大柄になります。
完全にのんけでアニオタ、二次元の女の子にしか興味はありません。
そんな亮太を実験台としてオモチャにしてしまうのです。

亮太はボクのゲーム仲間
小学校から知ってるが、
友達になったのは
中学校からだった。
学校では
大人しいキャラで
ほとんど無口だ。
亮太は完全にのんけ
アニオタで、2次元の
女の子にしか興味が無い。
小学校時代に肥満児で
イジメを受けたことが
トラウマなのかも知れない。
ジョボジョボ

肥満児特有の体臭で
いじめられた事で
人一倍体臭には
気を遣っている。
でもボクは亮太の
酸っぱい体臭を
クサイと思った事は無い。
亮太はデブの巨チンだが
男に興味は無いため
自分のデカさを意識した
事すら無かった。
逆に亮太の体臭を嗅ぐと
気持ち安らぐのだった。


いつもボクの前だけは
威張っている亮太が
僕の命令で服を脱ぎだした…
はい、分かりました。
亮太はブニプニのカラダに
コンプレックスを持ってる。
だからこんな風に
人の前で裸を見せるなんて
絶対にあり得ない…
上着より先に
パンツから脱げ！
恐る恐る命令すると
素直に命令に従う…
長い付き合いだが
亮太のチンポ見るのは
初めてでスゴく興奮した。

ボクの前ではいつも
憎らしいほど
威張った表情だったが、
キョトンとした
この素直な表情に
なんだか胸がキュンとした。
スゲえ！
ホントに脱いだ!!
うわ～亮太、デブだから
チンポ小っちゃいと
思ってたけど、
超太いじゃん…ｗｗ
よし、次は全裸のまま
オナニー姿を見せろ！

亮太は女の子のような
猫なで声でアンアンと
喘ぎながら
オナニーしているようだ。
あっア～ン
キモチイイ…
ああ～ん
くちゅ
くちゅ
シコシコ

全裸になれ！

はい、ご主人サマ

いつものように
ちんぐり返しで
ケツの穴を見せろ！

へへっ
どんな命令でも
思いのままだ

へへっ…ボクのサイズに
穴がパックリ開くぜ…

亮太のケツ毛〜♡

亮太の肛門は
ボクのオモチャ♡

クチュ

クチュ

学校では大人しくて
ひと言もしゃべらない。

ボクの前でだけ
ジャイアン
見たいな顔

きっとボクを
格下に見ている。

亮太は絶対に
他人に裸を見せない。

なのにケツ毛まで
見られてるって
知ったら…ふふっ

アッ
アアン

亀頭部分だけ入れて止める…
すると亮太の肛門がキュウ〜ッと
ボクのカリ首を締め付けてくる。

セックスに慣れていないボクは
腰を動かすと
直ぐにイッテしまう。
だから、
チンポを入れたまま
こうやって、
亮太の乳首を
クリクリ刺激する。
すると女の子のように
恥ずかしい喘ぎ声で
亮太のケツの肉壁が
ぐにゅぐにゅと
複雑な動きで
ボクのチンポを
刺激して来るんだ。

ほら、乳首が
キモチ良いんだろ？

クリクリ

ズプププ

ドロッ

アッ
アアン

人形の制御を解除後も
暗示がどれくらい効くのか
実験を開始した。

体臭コンプレックスの
亮太がシャワーにも入らず
直接家にやってくる。

そして汗ダラダラで
肥満児特有の
酸っぱい体臭を臭わせ

ボクの股間をガン見して
息を荒くしてくる。

トランクスの前開きから
少しだけハミちんぽ…
そういう偶然を
装っていたのだが、

亮太のガン見と
激しい息遣い、
そして亮太の体臭、
先走りとションベンが混じった
エロい匂いに、ボクはフル勃起…
思いっきり
トランクスの前開きから
突き出していた。

実際には2人ともトランクスとTシャツは着ている。
初日の失敗からもっと直接的に亮太が行動するよう命令して置いた。
亮太もボクもTシャツとトランクスだけだ。
今日こそは、人形の制御無しで亮太に変態行為をさせられるか検証だ！
このマップは有料だしなぁ…
ハアハア
ぐぐっ

なにチンポ見せつけてんだよ〜
ほんとはこうして欲しいんだろ〜？
キャ〜〜
優しい亮太が
別人のように豹変して
襲いかかってきた。

おい、何だよこの白くて
細っそいチンポはよぉ…
まるでボールペンじゃぁ
ねえかよぉ…
もしかして
真性包茎かぁ？
おおっ？
一応剥けるじゃん…

な？いいだろ？
どうせこんな
小っちゃい
包茎チンポじゃ
使い道ねえだろ？
だからオレの
ケツに入れさせて
やっても良いぜ…
ハアハア…

ペチュ
クチュ
クチュ
ぐいぐい

ハアハア…ウメえ…
マコトのチンポ
ウメえよぉ…どうして
こんなにウメえんだよぉ…
意識の無い状態での
フェラとは
比べようも
無いほど激しく
吸い付いてくる。
やばい…
普段は仮性包茎の
ボクのチンポには
刺激が強すぎる…

亮太もボクに
チンポをしゃぶって
欲しいのか、
思いっきり
ボクの顔に
ヌルヌルの
クサイチンポを
押しつけてくる。
ぐっぐるしい…
スゴく臭い…
でもそんな亮太の
チンポのニオイに
何故か興奮が
高まっていた。

そしてコトが終わり、ホッとした満足げな表情で、亮太はボクに抱きついてきた。汗でヌルヌルの肌がムニュッとキモチいい。そしてそのままキスをして来たのだ。

ボクは必死にフォローしたが…

つづく…

体型コンプレックスの亮太は、
いかに心許した親友マコトの前でも
服を脱いで肌をさらすのを避けていた。

体育の着替えでさえも目立たないように
教室の隅っこで人目を気にして着替える。

水泳の時期も、最近流行の
水泳用の上着を着て肌を隠す。

マコトはそんな亮太を裸にしてオナニー姿を観察し、
ケツ毛まで観察して催眠レイプを繰り返す。

そして意識がある状態で
亮太自ら全裸になってセックスさせることに成功した。

唯一心を許せる親友のマコトと
キモチいいセックスを終え、幸福の余韻に
浸りながらキスをしようとした亮太だったが、

マコトにキスを拒まれた瞬間、我に返ってしまう…

一番大切なマコトにだけは見られたく無かった
自分の醜いぶにょぶにょのカラダ、
亮太は己の体臭で、マコトに嫌われてしまったのでは…
と深く傷つく。
（その体臭をマコトが好きだとは知るよしも無い）

あとがき

南国球児作品を手にして頂きありがとうございます。

本作品は小説メインで製作に取りかかりました。

挿絵は控えめにして直ぐに続きに取りかかる予定でしたが(汗)

今回は、南国球児作品では珍しく

ぽっちゃり君を主役級に描きました。

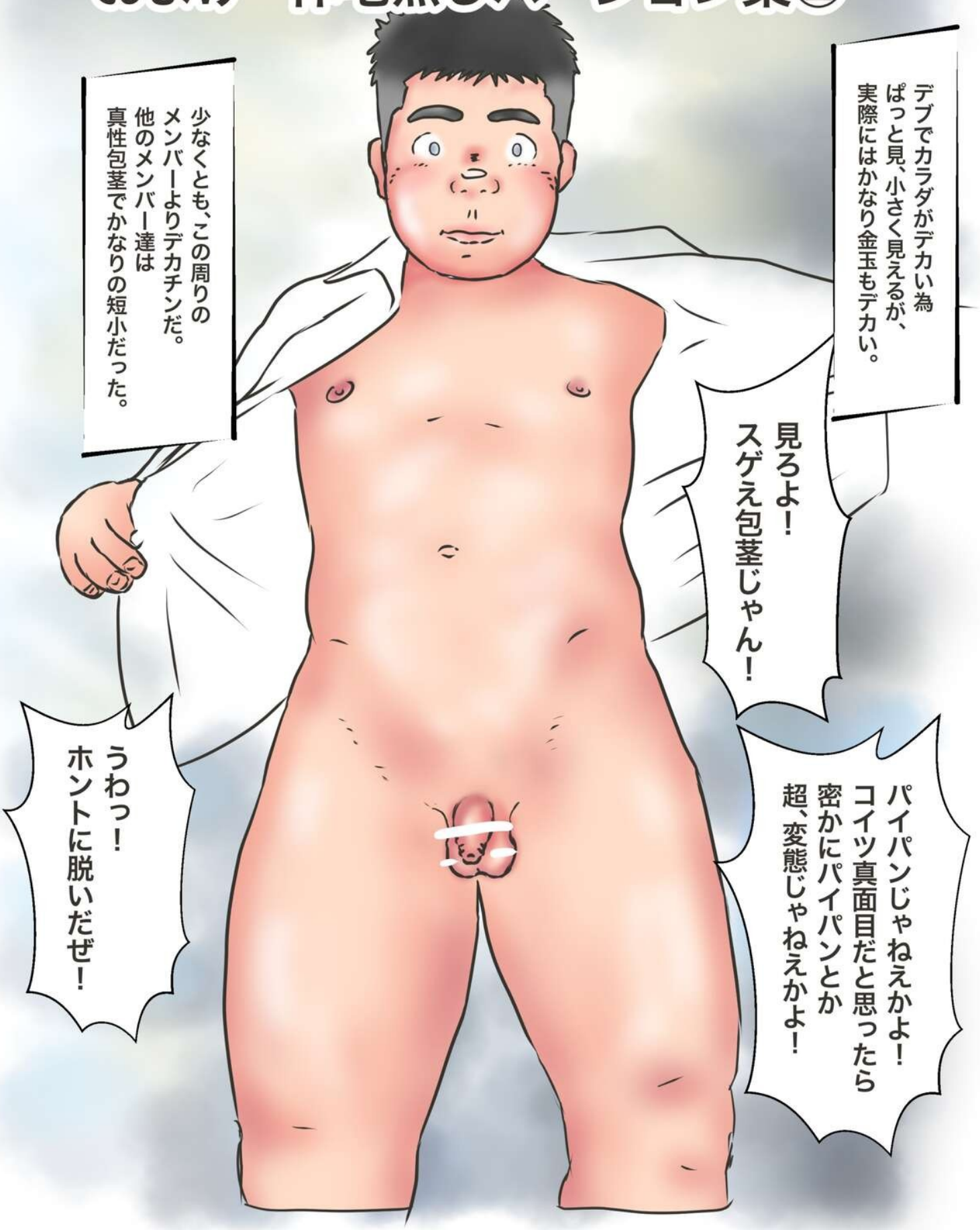
小説で語られる野球部の龍輝くんは、

次回作のおたのしみとします。

おまけ　体毛無しバージョン集①

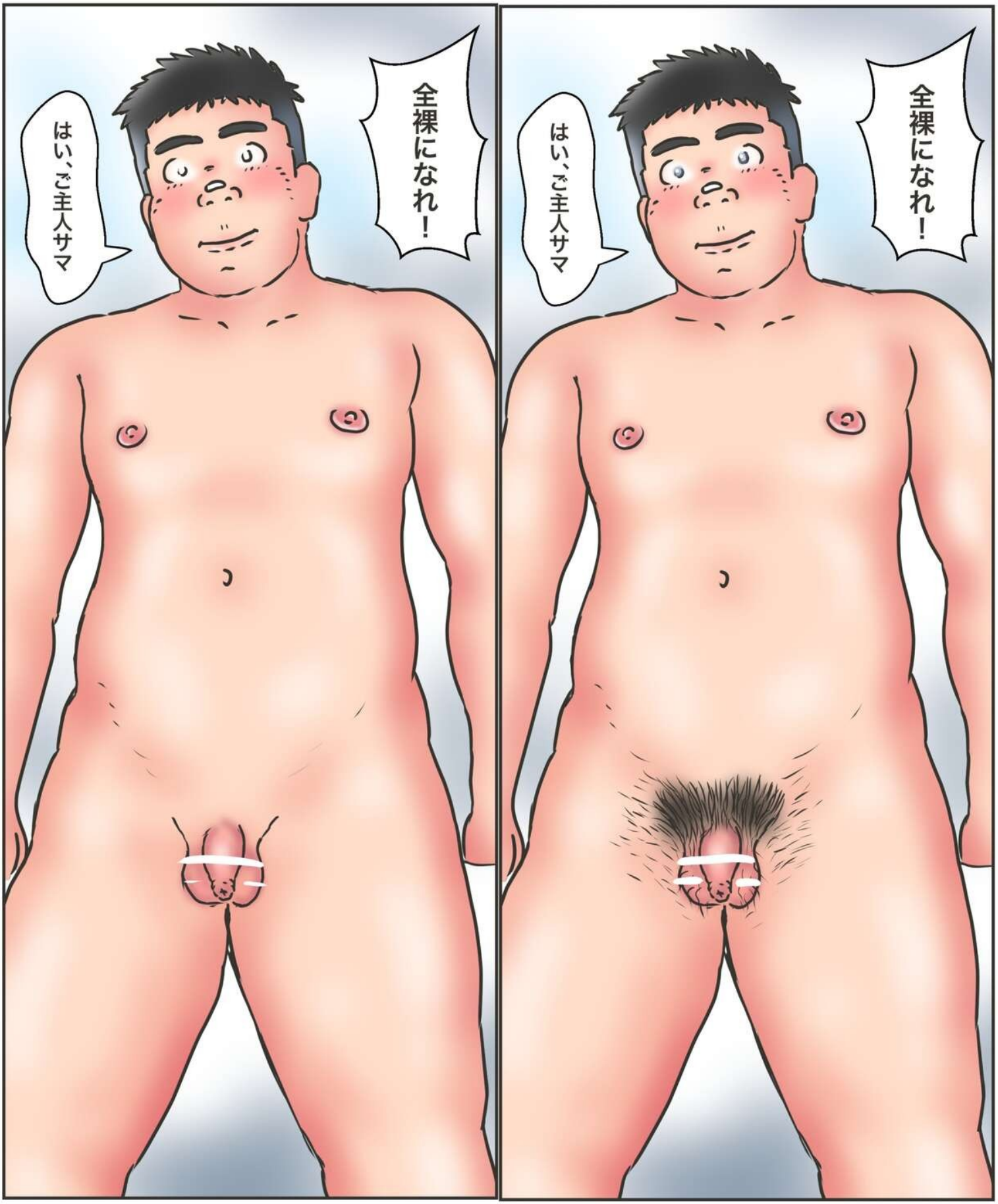
ここから先の
おまけバーションは
小説本編とは関係の無い
イラストに合わせた妄想です。

おまけ　体毛無しバージョン集②



おまけ　体毛無しバージョン集③

おまけ　体毛無しバージョン集④



おまけ
体毛無しバージョン集⑤

幼馴染みのちんぽが
トランクスの前開きから
ニョッキしていた…
亮太は気がつくと
幼馴染みの
白くて細い
包茎チンポを
握っていたのだ…
ハアハア
ビビッ

おまけの妄想イラスト

幼馴染みのマコト…
亮太にとって唯一
心を許せる親友

マコトの前でだけ
亮太は男らしく成れる…

マコトのことを
性的な目で見た事なんて
これまで
一度も無かった…

色白でプニプニした
女の子のような肌

そして白くて細く可愛いチンポ…

亮太は可愛いマコトのチンポを
自分のケツの穴に入れたいと思った

バージョンA

パイパンの高校生ふたり
幼馴染みだが、亮太はマコトの
チンポを初めて見た…
細くて小っちゃくて
ビンビンに硬い
勃起してても
先っぽまでしっかり
被っているマコトの
ピンク色のチンポに
これまでに無い
興奮を覚えていた。
ゆっくりと
上下にシゴキながら
皮を剥いてみた…
皮の中にはパンパンに膨らんだ
透明なピンク色の亀頭が隠れていた。
バージョンB

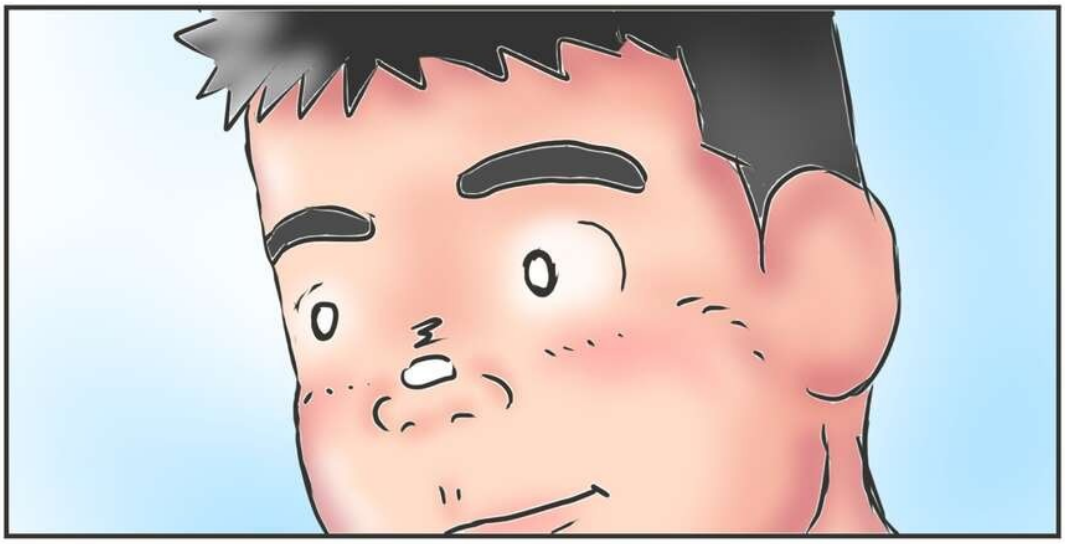
＝続編の予告＝

ついにマコトは野球部・龍輝くんの体毛を手に入れる。

そして恥辱のあやつり人形は龍輝くんにチェンジ…

親友である亮太に対してとは違い容赦ない恥辱調教…

一方、人形の暗示から解放された亮太との関係は…？



続編をおたのしみに！

２０２３年7月　南国球児